



東洋大学

ISSN 1881-0276

ライフデザイン学研究

Journal of Human Life Design

第 11 号

東 洋 大 学

ライフデザイン学部

目次

巻頭言	
学部10周年を迎えライフデザイン学の構想を確認する……………奥村 和正	3
退職者のメッセージ	
11年間をふり返ると……………井上 治代	4
論文	
「デンマークの3市町村自治体（オーフス・シルケボー・ネストベ）における24時間 ホームケア基本統計調査と夜間時間帯のサービス提供のしくみ」…渡辺 裕美	7
「精神科ソーシャルワーカーの援助に対する自己批判」……………國重 智宏／鬼塚 香	31
小学校におけるすべての子どもへの包括的な支援に関する一考察 —「学校教育相談」のこれからを探る—……………中原 美恵／都丸けい子	57
カトリック修道女会による明治期の孤児救済活動……………菊地 章太	79
住民との共同作成により作成した健康体操プログラムの有用感および 実施容易性……………神野 宏司／岩本紗由美／坂口 正治 齋藤 恭平／松尾 順一／野村 豊子	97
東南アジアで英語のボランティア先生のトレーニング……………ランバート・ニコラス	107
日本への身体障がい者スポーツ移入期において国立身体障害センターの 果たした役割（1960年代-1970年代半ばまで）……………金子 元彦	119
ラット肩関節の構造に及ぼす尾部懸垂の影響 吉良裕一郎／荒木美智子／大迫 正文	129
Study on structural changes of skin and subcutaneous tissue of foot by mild pressure in rats……………荒木美智子／吉良裕一郎／大迫 正文	141
グループホームにおける介護職員及び 入居者の生活の合理性に資する建築空間の研究……………谷本裕香子	157
研究ノート	
認知症介護教室等の開催状況調査報告……………午頭 潤子	175
高齢者介護施設における介護職の勤務継続に関する文献レビュー —否定的要因に関する研究から—……………小野内智子	185
保育者間の日常的な話し合いを通しての子育て支援のあり方 —2歳児クラス午睡時、話し合い場面の分析—……………伊藤 美佳	201
子ども大学あさかにみるライフデザイン学部生の活動意義 ……………仲野 修平／白石 弘巳／本多 信行	225
現代日本における樹木葬の実態と今後 —背景・形態・申込者の状況—……………井上 治代	235

総説		
「缶飯」について	坂口 正治	249
研究報告		
ヘルシンキにおける世界体操祭（Gymnaestrada）2015に関する研究報告	坂口 正治／松尾 順一	259
ドイツ体操祭（Deutsches Turnfest）に関する近年の研究動向.....	松尾 順一	267
プロジェクト研究報告		
近世以降の日本における宗教的孤児救済思想とその実践に関する比較研究	菊池 義昭／菅田 理一／鈴木 崇之／菊地 章太	277
日独比較研究からみた地域住民のスポーツクラブ継続参加理由の差違	神野 宏司／鈴木 智子／嶋崎 博嗣／松尾 順一	285
重度障害児の移動を支援する機器の評価に関する研究 2013-2014年度ライフデザイン学部プロジェクト研究報告	繁成 剛／高橋 良至／金子 元彦	289
多様な主体による地域社会形成のフレキシビリティに関する実証的研究（H25-26） ～飯能市吾野地区のまちなみ継承を事例として～	菅原麻衣子／井上 治代	303
東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規.....		321
東洋大学ライフデザイン学部紀要査読制度内規.....		324
東洋大学ライフデザイン学部紀要原稿執筆要領.....		326

学部10周年を迎えライフデザイン学の構想を確認する

人間環境デザイン学科 奥村 和正

平成27年度、ライフデザイン学部は創設から10年を経て、年間を通じ数々の記念事業を行い、なかでも11月25日には盛大な10周年記念式典が行われた。

この間、10年間の歩みを振りかえる機会を数多く持つことができた。10年の歳月を経て、ライフデザイン学部の理念が全くぶれることなく発展し続けていることを確認し、また創設当初は先駆的であったライフデザインという学問領域の設定も、多学の追随を生み、いまやひとつの分野へと成長していることに学部の果たしている社会的役割を感じる。

古川初代学部長が10周年記念誌への御寄稿の中で次のようなことを語っておられた。
“(ライフデザイン学部の構想は)生活支援学、健康スポーツ学、人間環境デザイン学という三通りの領域をデザイン科学、設計科学という額縁を与えることによって一つの学部に統合化するという構想であった。”

古川先生の言われる「設計科学」とは、分析研究から計画づくり、そして実践の方法論に至る一連のプロセスを通貫させようとする目的指向の学問体系のことを指していると考えられる。従って、ライフデザイン学の研究活動は、学際的であるだけでなく、理論と実践をいかに繋ぐかという縦糸としてのプロセスのあり方に大きな特徴を持つものということになる。

その点において、生活支援学、健康スポーツ学、人間環境デザイン学という三通りの領域は、極めて相通ずるプロセスを内包しているのではないかと思う。理論と実践の繋がりを互いに確認し、社会に発信してゆく媒体として、この「ライフデザイン学研究」の果たす役割は大変大きいと思う。第11号となる本号においても、総説1篇、論文10篇、研究ノート5篇、研究報告6篇と、多くの研究成果が掲載され、巻を追うごとに掲載数と内容は充実され、期待に応えるものとなっている。

東洋大学では昨年度よりスーパーグローバル大学に向けた取り組みもはじまっている。グローバルであることの前提として自らのアイデンティティーを明確にし、発信することが必要であり、その意味でもこの「ライフデザイン学研究」を役立てていきたい。

東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規

平成17年4月1日
施行

改正 平成19年4月1日 平成21年4月1日 平成27年4月1日
平成27年7月1日

(目的)

第1条 東洋大学ライフデザイン学部紀要『ライフデザイン学研究』（以下「紀要」という。）はライフデザイン学部（以下「学部」という。）の教育と研究を促進し、教員を中心としたそれらの成果発表の場として、さらに「ライフデザイン学」の形成とその発展に寄与することを目的とし、関連の論文、研究ノート、書評、研究展望、学部教育に関する諸活動報告等を掲載発表する。

(刊行物と編集)

第2条 学部で刊行する紀要はライフデザイン学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）内規第4条による。

(投稿資格)

第3条 紀要に投稿できる者は原則として学部の専任教員とする。ただし、以下の場合には、委員会の判断で受け入れることができる。

- (1) 委員会において特別に依頼する場合
- (2) 学部専任教員が代表である共同執筆原稿の場合
- (3) 学部非常勤講師から希望があった場合
- (4) 学部生の執筆で学科または専攻の推薦を得たもの
- (5) 大学院生の執筆で専攻の推薦を得たもの

(原稿の種類)

第4条 この紀要に投稿できる原稿の種類は、次のとおりとし、未発表の原稿に限ることとする。

種 類	内 容
論文	オリジナルな研究成果をまとめたもの（査読対象とする）
研究ノート	研究の中間報告、覚書および新しい研究方法についての報告、翻訳（投稿者の依頼があった場合、査読対象とする）
書評	書籍、文献の批評、紹介
研究展望	それぞれの研究分野の成果をまとめたもの、研究動向を展望したもの
学部活動記録	当該年度の学部活動を報告する内容のもの
学部教育活動への取り組み	学部での教育内容を評価するもの
大学院生の論文（概要）	大学院生の研究成果

学部生の論文（概要）	学部生の学習成果
総説	ライフデザイン学全般もしくは個別領域にかかわる総括的論述
資料	研究上価値ある資料あるいは新出資料などの紹介・解説
研究報告	社会実践にかかわる活動の研究報告、作品制作の報告、作品解説など
学部プロジェクト研究報告	学部プロジェクト研究の成果を要約して報告するもの

（二重投稿の禁止）

第5条 前条に該当し投稿された第6条に規定する原稿であっても、同一の原稿を本学紀要以外の他紙に投稿することはできない。また二重投稿が判明した場合は掲載を中止する。

2 当該原稿を他紙に投稿する場合は、委員会より正式に不採用の連絡を受けた後に行う。

（申し込みと締め切り）

第6条 投稿申し込みと締め切り期限は、その都度委員会が別に定める。

（執筆要領）

第7条 原稿の執筆にあたっては、別に定める紀要執筆要領による。

（原稿の査読と掲載の可否）

第8条 査読は別に定める「ライフデザイン学部紀要査読制度内規」に基づき行う。

2 掲載の可否は、第1項の結果に基づき、委員会が決定し、投稿者へ結果を連絡する。

3 投稿数の制限は定めないが、同一号に原稿が複数採択された場合、次号に繰り延べて掲載することがある。

（補筆と修正）

第9条 委員会は、必要に応じて、執筆者に補筆や修正を求めることができる。

（原稿の返却）

第10条 投稿された原稿は、執筆者に返却する。

（配布先等）

第11条 紀要の配布先は、毎年委員会が定める。

2 執筆者には、完成した紀要を電子媒体にて1部配付する。

3 学部ホームページに電子情報として掲載することができる。また管理サーバー等の掲載条件が可能な範囲でデータは蓄積する。

（原稿料など）

第12条 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。

(著作権等)

第13条 本学部が編集刊行する紀要の編集著作権は本学部に帰属する。

2 紀要に掲載された個々の著作物の著作権は、当該著作物の著作権者に帰属する。

3 紀要に掲載された個々の著作物について、著作権侵害、名誉毀損、またはその他の紛争が生じた場合、当該著作物の著作者を当事者とする。

(改廃)

第14条 本内規の改廃は、教授会の承認を得るものとする。

附 則

この内規は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成27年7月1日から施行する。

東洋大学ライフデザイン学部査読制度内規

平成17年4月1日
施行

改正 平成19年4月1日 平成27年4月1日

(目的)

第1条 本内規は、東洋大学ライフデザイン学部（以下「学部」という。）の刊行する『東洋大学ライフデザイン学研究』（以下「紀要」という。）と掲載される個々の著作物の質の向上と保証を図ることを目的とし、査読制度により審査を行う。

(査読の対象)

第2条 査読は、論文および投稿者より審査依頼がなされた研究ノートについて行う。査読された原稿についてはその旨を明記する。

(査読の内容)

第3条 審査原稿について、東洋大学ライフデザイン学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）の定めた学部内および学部外各1名の査読員による体裁、学術的内容の審査を行い委員会に結果を報告する。

2 東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規第4条の査読対象としない原稿について、委員会が定める学部内の校正委員1名により、体裁、内容の校正について委員会に助言を行う。

(査読員の要件)

第4条 学部内査読員は、学部専任教員とする。

2 学部外査読員は、その著作物の内容についての専門領域における学部外の専門家又は学識者とする。

(査読員の委嘱)

第5条 第3条について、委員会は査読員、校正委員を選出し、学部長により委嘱する。

(査読員の非公開)

第6条 学部内査読員については、いかなる理由であっても公開しない。

2 学部外査読員については、紀要に採択の上、掲載されるときに限り各著作物の巻末に査読員を掲載する。

(審査)

第7条 2名の査読員は、執筆者の原稿について速やかに査読の上審査を行い、ABCで評価する。Aは「採択（軽微な字句の修正を含む）」、Bは「一部修正の上採択」、Cは「不採択」を意味する。又、その結果を委員会に報告する。

2 2名の査読員がAA、AB、BBの評価の場合は査読審査合格とし、掲載可とする。BC、CCの場合は査読不合格とし、掲載不可とする。ACの場合はさらに第3者に査読を依頼し、A又はBの場合は掲載可とし、Cの場合は不合格とする。

3 査読審査結果は委員長より通知する。

(修正)

第8条 委員会は、上記の審査結果に基づき、採用論文について執筆者に修正を求めることがある。それ以外は審査後の修正は認めない。

(審査料)

第9条 学部外査読員には次の査読審査料を支払う。

(1) 原稿1本につき10,000円とする。

(改正)

第10条 本内規の改廃は、教授会の承認を得るものとする。

附則

この内規は、平成17年4月1日から施行する。

附則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

東洋大学ライフデザイン学部紀要原稿執筆要領

平成17年4月1日
施行

改正 平成19年4月1日 平成27年4月1日

1. 使用言語

使用言語は、特に制限しない。ただし、印刷等にあたり特別の技術を有する言語、査読委員の選出に困難を来す言語、その他の事情を有する言語については、事前に編集委員に相談すること。また母語以外を使用する場合には当該言語のネイティブ・スピーカーによる校閲を受けたうえで提出することとする。

2. 執筆者

投稿資格者は、東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規第3条に定める者とし、共著者がいる場合は氏名の右肩に*印を付けて示すこととする。

3. 要旨及びキーワード等

原稿の本文が日本語の場合には、欧文（英・独・仏のいずれか）の表題、著者名、要旨及びキーワードをつけること。欧文要旨は100～150ワード程度とする。

原稿の本文が英語又はその他の言語の場合には、各言語の要旨、キーワードのほかに、日本語の表題、著者名、要旨及びキーワードをつけること。日本語要旨は600～800字程度とする。

欧文要旨は、当該言語のネイティブ・スピーカーによる校閲を受けることとする。

4. 本文及び脚注・注

本文は原則として横書きとし、英語の場合はダブルスペースで記述する。原稿用紙の大きさはA4サイズを標準とする。長さは日本語の場合はA4用紙30枚を超えない程度とする（いずれの場合も図表を含むものとする）。他の言語の場合もこれらに準ずる。以上の内容に依りがたい時は編集委員と協議して決めることとする。

脚注は、本文中の該当箇所の右肩に一連番号を打ち、注そのものは当該ページの下部に記入する。各章毎、あるいは本文末に注をまとめる場合も、注番号は当該箇所の右肩に一連番号で示すこととする。

提出時に総字数を示すこととする。

5. 参考文献

参考文献は、原則として以下の要領で記載する。

(1) 和文の参考文献

① 雑誌

著者名、表題、雑誌名、巻数（号数）、（刊行された西暦年）

② 単行本

著者名、署名、発行所、ページ数、（発行された西暦年）

③ 編著書の中の1章又はシリーズの中の1巻

著書名、章名、編者（又は監修者）名、書名、発行所、ページ数、（刊行された西暦年）、又は著書名、書名、編者（又は監修者）名、シリーズ名、第XX巻、

発行所、ページ数

④ その他の参考文献については、上記①、②、③に準ずる。

(2) 欧文等の参考文献の場合

上記(1)に準ずる。ただし、書名などについては、主な単語(Word)、固有名詞などは大文字で書き始めること。

6. 図表

- ① 図は著者の作成したものをそのまま印刷するので、黒インクで浄書(トレース)すること(ワープロ印刷でも可)。トレース等が困難な場合にはトレース料は自己負担とする。
- ② 図は、なるべく白紙に黒インクで大きめに書くこと。又、各図は一枚毎に別々の用紙に書くこと。
- ③ 図中の文字数字等は写植されるので、正確に書くこと。大文字と小文字、イタリック体、ゴシック体などの違いにも注意すること。
- ④ 図(写真を含む)及び表には必ず名称を付けること。
- ⑤ 図表の番号は、それぞれが本文に現れる順にしたがって、通し番号で付けること。又、本文中の各図表の挿入箇所は明確に指示すること。
- ⑥ 各図表の作成に使用した資料あるいは文献は、必ず注として明記すること。

7. 原稿の提出

原稿はテンプレートに添って入力したものをハードコピー3部及び電子データで提出するものとする。電子データには、著者名を記述する。写真や図表を原稿に組み込まないで別途提出する場合は、挿入位置を指定すること。

8. 改廃

本要領の改廃は、ライフデザイン学部紀要編集委員会の議を経て行うものとする。

附 則

この要領は平成17年4月1日から施行する。

附 則

この要領は平成19年4月1日から施行する。

附 則

この要領は平成27年4月1日から施行する。

ライフデザイン学研究第11号 編集委員

菅原 麻衣子 (人間環境デザイン学科)

本名 靖 (生活支援学科)

高橋 直美 (生活支援学科)

井上 治代 (健康スポーツ学科)

Editorial Board

SUGAWARA Maiko (Department of Human Environment Design)

HONNA Yasushi (Department of Human Care and Support)

TAKAHASHI Naomi (Department of Human Care and Support)

INOUE Haruyo (Department of Health Care and Sports)

ライフデザイン学研究 第11号

2016年3月31日発行

発行者 東洋大学ライフデザイン学部

〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

TEL048(468)6311(代) FAX048(468)6320

印刷所 株式会社 美巧社

Journal of Human Life Design

NO.11

Contents

OKUMURA Kazumasa Prefatory Note	3
Messages from Retired Persons	
INOUE Haruyo	4
Articles	
WATANABE Hiromi Statistical questionnaire survey and field work in 24 Hour Home Care in Denmark —How night home help service and home nursing is delivered in three Danish municipalities in Aarhus, Silkeborg and Naestved—	7
KUNISHIGE Tomohiro, ONITSUKA Kaori The self-criticism to the attitudes toward their practice by the Psychiatric Social Worker	31
NAKAHARA Yoshie, TOMARU Keiko A Study on Comprehensive Support to All Children in Elementary School —The Future of 'School Counseling by Teachers' in Japan—	57
KIKUCHI Noritaka L'aide sociale pour les orphelins à l'époque Meiji faite par les religieuses de l'Église catholique	79
KOHNO Hiroshi, IWAMOTO Sayumi, SAKAGUCHI Masaharu SAITO Kyohei, MATSUO Junichi, and NOMURA Toyoko Development of a Physical Exercise Program for Community-Dwelling Elderly	97
LAMBERT Nicholas Exchanging Ideas: volunteer English teacher training in Southeast Asia	107
KANEKO Motohiko The role of the National Center for Persons with Physical Disabilities in a physical disabled sports introduction period to Japan from (1960s to mid-1970s)	119
KIRA Yuuichiro, ARAKI Michiko, OHSAKO Masafumi Effects of tail-suspension on structures of shoulder joints in rats	129
ARAKI Michiko, KIRA Yuuichiro, OHSAKO Masafumi Study on structural changes of skin and subcutaneous tissue of foot by mild pressure in rats	141
TANIMOTO Yukako Study on architectural layout in its contribution to the efficiency of group home staff and residents' life style	157
GOTO Junko A report of the meetings held for caregivers of dementia patients	175
ONOUCHI Tomoko A review of literature on Work Continuance of care workers in Elderly person nursing homes —From research on the negative factors—	185
ITOH Mika The way of Child-Rearing Support by Care-Takers in Narrative —Analysis of the discussions during the afternoon nap in a 2 years old child class—	201
NAKANO Shuhei, SHIRAIISHI Hiromi, HONDA Nobuyuki Significance in volunteer activity of the students concerned with a variety of events in 'KODOMO University ASAKA'	225
INOUE Haruyo The present situation and the future of "Tree Burial" in Contemporary Japan —Background Form The situation of the applicant—	235
SAKAGUCHI Masaharu Cooking Rice in a Can	249
SAKAGUCHI Masaharu, MATSUO Junichi A report on Gymnaestrada 2015 in Helsinki	259
MATSUO Junichi Recent historical studies on German Gymnastics Festivals	267
KIKUCHI Yoshiaki, SUGETA Riichi, SUZUKI Takayuki, KIKUCHI Noritaka Comparative Studies on the Religious Relief Thought for Orphans and Its Practice in the Modern Japan	277
KOHNO Hiroshi, SUZUKI Tomoko, SHIMAZAKI Hirotsugu, MATSUO Junichi The reason of continuous participation of community dwelling elderly for sports club by comparative study	285
SHIGENARI Takeshi, TAKAHASHI Yoshiyuki, KANEKO Motohiko Study on the assessment of walking aids for children with severe motor disabilities	289
SUGAWARA Maiko INOUE Haruyo The Empirical Study on the Flexibility of Communities by Diversified Actors —Case Study of the Preservation of Townscape in Agano district, Hanno City—	303